

中学校

ネパール研修に参加して

千葉明德中学校 教諭 渡辺 哲史

きっかけ

2014年夏、私はネパール研修に参加した。周囲の人たちに「自分から希望したのか」とよく尋ねられたが、答えはYESだ。実は私が千葉明德高校に在籍していたときから望んでいた。全校集会であったか記憶は曖昧であるが、「ネパールに姉妹校ができた」と聞いてから密かにネパールへ思いを寄せていたのだ。確かにネパールがどんなところであるかはぼんやりとしたイメージでしかなかった。しかし、遠く離れた国に千葉明德の姉妹校があると思うと何だか愛着がわいたのだ。それから時は経ち、私は教員として千葉明德に戻ってきた。それと同時にネパール研修があることを知った。私がネパール研修を志望した目的は2つ。「姉妹校がどのような学校なのかを感じる」と「姉妹校の生徒たちに授業をして楽しませること」であった。正直なことを言えば、海外にはアメリカにしか行ったことがなかったので、アジアに足を運んでみたかったというのもある。ともかく、ネパールというなかなか自分では行くことが無いであろう、まだ知らぬ国に興味津々であったのだ。

ワクワクと衝撃

まずはトランジットでタイに滞在した。そこでも私にとってアジアの国は初めてであったのでカルチャーショックがあった。何と表現すれば伝わるのかよくわからないが、街がエネルギーに溢れているのだ。ここで感じたことはワクワクである。これから始まる旅に期待でいっぱいであった。

翌日、いよいよネパールの首都カトマンズに入った。空港に到着した瞬間から何とも言えない空気を感じた。空港を出るとその予感の的中した。行き交う自動車とバイクの量は無数に在り、その自動車も日本では廃車になる様なものがほとんどであった。電力が十分に無く信号の大半が利用されていない。それに伴い交通ルールが存在していないかのような道路ではクラクションの音が溢れていた。日本だけで暮らしていれば恐らく一生分に値するくらいの、いやそれ以上のクラクションを聞いた。排気ガスにより空気も悪く、独特なおいも印象的であった。前日のワクワクが一気に不安へと変わった。タイで受けたカルチャーショックが懐かしく思うくらいの衝撃だった。

それでも人間の適応能力とはすごいもので翌日にはそれほど驚かなくなったのだが、次に訪れたネパールガンジという街がすごかった。ホテル前の道路は土でぼこぼこであり、牛やロバがあちこちにいた。カトマンズとは違ってのどかな雰囲気だ。ただ、私はまるで過去の日本(実際に見たことは無いが…)を見ているかのようで不思議な気分にならずにはいられなかった。

いよいよ本番

さて、今までのことも十分本番かと思うくらいの衝撃であったが、ここからが研修のメインである。姉妹校のあるデイリチョール村までは最寄の空港から徒歩で5時間程掛かった。正午頃に出発した私たちを迎えたのは日が沈んで電気が無く暗くなった村だった。

そこで感じたことは多々あるのだが、ここに全てを記すと膨大な文量になってしまうので、あえて姉妹校を訪問した際の感想のみにする。率直に言って姉妹校の環境は恵まれていないと思う。日本で言えば下は幼稚園生から上

は高校3年生までが一堂に学んでいる。それにも関わらず校舎は決して大きくなく、教室も狭い。黒板は小さく、日本の様に机や椅子がひとりひとりに与えられているものの、とても窮屈である。そんな中でも、授業を行った際に気付いたのだが、誰一人不平や不満を言わないのだ。与えられた環境に感謝しているようにさえ思えた。私は日本の中学1～3年生にあたるクラスで日本語の早口言葉を教えた。「カエルポコポコミポコポコ…」上手くは言えないながらも、彼らにとって普段は聴くことのない日本語の音を楽しんでいるようだった。

しかしながら姉妹校を訪れて私が一番驚いたのは、ネパールの生徒と交流するうちに私が所属している学年のことが気になって仕方なくなったことだ。今年度に初担任ながらも今までそのように「かわいい」とか「会いたい」と感じたことは一切なかったのだが、「元気かな」「しっかりやっているかな」と遠く離れて初めて抱いた気持ちであった。私がネパールで体験している衝撃と感動を一刻も早く生徒に伝えたくなった。

その後、お腹を壊したことが唯一の後悔であるが、その他に関してはとても有意義な研修であった。何よりも研修に参加したメンバー、ガイドのロビンさんなど人に恵まれたおかげである。最後に、今回ネパール研修という貴重な機会に参加させていただいたことを深く感謝申し上げ、私の報告とさせて頂く。また近い将来、今度は万全の体調でネパールを訪れたい。